

ふるさと見て歩き

第41回

上大賀原坪の

ゼンコッチャマ

上大賀地区の原坪には、「ゼンコッチャマ」という講があり、今も活動を続けています。

◇ゼンコッチャマとは

ゼンコッチャマとは長野県にある善光寺を信仰する講組織です。善光寺はどの宗派にも属さず、阿弥陀如来を信仰すれば誰でも極楽往生ができるという教えで広く庶民の支持を得ました。上大賀原坪は原第一と第二に分かれており、現在はここから十五戸ほどが講に参加しています。「善光寺様」と呼び習わされているコッチャマと呼び習わされているようです。

上大賀の宿通りを北に向かっていると細い旧道と分岐するところがあり、そこにゼンコッチャマと呼ばれる石祠が祀られています。かつては毎年善光寺からお札を郵送してらつてこの石祠内に祀っていたようですが、善光寺への参拝は行われてはいませんでした。

ゼンコッチャマは春の彼岸と盆の年二回、お祭りがあります。春の彼岸は、当初は中日に行っていました

が、今は中日前の日曜日に行われています。各家から婦人が出て、宿になった家で投げ餅を行った後、参加者で飲食をします。

一方、盆の十六日は主に男が参加して実施します。午前中に集まってゼンコッチャマの周辺を清掃し、「善光寺」などと墨書した紙を張って灯笼を作り、飾ります。その後、宿になった家に集まり年に一度の会合を持ちます。夕方再びゼンコッチャマに集まり、灯笼に火を灯して参拝するそうです。



◇ゼンコッチャマの「記録簿」から

ゼンコッチャマは、年二回のお祭りのほか、毎月積み立てをして旅行に出かけたりもしています。

そのような講の活動の記録を記入した帳簿が数冊残されて大切に保管されていますが、そのうちの一冊、昭和二十五年以降記入してきた「記録簿」にはゼンコッチャマの講員、例祭や旅行の執行について記されています。

これによると昭和三十(一九五五)年十二月に第一回の信濃善光寺参拝が行われています。当時二十七名の講員を四、五名ずつの五班と不参加組に分け、順番に代参するようにしていました。第一回の参拝では五名

の代参が出て、様々な地域の参拝者七百名とともに団体参拝したことがわかります。大宮駅を午後五時に出発し、夜行列車で賑やかに長野に向かい、駅からは善光寺の僧侶の案内を受けて参拝し、温泉に投宿、翌日帰途に着くという行程でした。

善光寺祭典帳

昭和三十四年八月九日(善光寺)

▶昭和三十四年の「善光寺祭典帳」

また昭和三十七年には講の参加の有無を問わず原坪地区全体から合わせて六十名の参加者を得て日帰りの東京観光を行っています。皇居、国会議事堂などの古くからの東京名所を周るものでした。昭和三十七年の日本は高度経済成長期の真っただ中にありました。この時期を境に古くからの日本の生活習慣の多くが激変していくのです。核家族化による住環境の変化、サラリーマン世帯の増加による都市集住化と農村の過疎化など様々な変化がありました。二年後の東京オリンピックを控え、急速に成長する中で都市と農村との格差が拡大していく時期でした。カラーテレビが一般に普及するのは東京オリンピック以後の昭和四十年代。それまでは都会からの情報を得る機会は何となくなかったことでしょう。当地からみた当時の東京は、現在では想像もつかないくらいに驚きの連続だったのでないでしょうか。

ゼンコッチャマの旅行はこの後もほぼ毎年開催されており、十年分の記録があります。東京観光の翌年からは県内や福島など近隣の地域になりましたが、参加人数は変わらず六十人弱という大規模なものでした。善光寺への参拝は第一回目以来途絶えていたましたが、今年第二回目が行われることになったそうです。

ゼンコッチャマはもともと善光寺を信仰する講集団でしたが、生活の近代化に伴い、信仰の有無にかかわらず地域の人々全体を含みこんだレジャーとして講中の行事を存続させていきました。講や年中行事は年々途絶えていますが、その原因のひとつに高度経済成長による生活の変化があげられます。ゼンコッチャマはその時期をうまく乗り越え、奇跡的に現在に引き継がれています。そして区内の人々の交流の場としての機能を果たしました。

市内にはこのように細々と続けられている講や行事がまだまだあります。続いてほしいと願う反面、続けていく苦勞が計り知れないこともよくわかります。せめて断絶する前に、郷土の人々の活動を記録に残したいと、情報の収集を続けています。

篠田猛利さんに聞き取り調査に御協力をいただきました。

(参考)『大宮町の年中行事』歴史民俗資料館大宮館

☎52-1450